

"Do Firms Benefit from Multiple Banking Relationships? Evidence from Small and Medium-Sized Firms in Japan"

一橋大学 式見 雅代

< 報告要旨 >

This paper examines empirically the effects of multiple banking relationships on the cost and availability of credit. The analysis is based on an unbalanced panel data set for Japanese small and medium-sized firms over the period 2000-2002. The Hausman-Taylor estimator is used to allow for possible correlation between unobservable heterogeneity among firms and multiple banking relationships. The results suggest that the cost of credit is positively correlated with the number of banking relationships when the endogeneity of the banking relationships is considered. Multiple banking relationships have a positive effect on the availability of credit for financially constrained firms.

< 討論者からのコメント >

日本銀行 粕谷 宗久

1. 企業の取引先金融機関数が企業のコストに与える影響を推計する際、取引先金融機関数の内生性による有り得べきバイアスを、Hausman and Taylor (1981)の推計方法の巧みな援用でコントロールすることを試みた点に、この論文の特徴がある。取引先金融機関数が企業のコストに与える影響を分析する先行研究がある中で、取引先金融機関数がどのように決定されるかを分析する先行研究もあることを考えると、筆者がこのような研究の方向性を選択したことは適切と言える。今後、この領域での研究を深めるとすれば、一つの可能性としては、現段階で取引先金融機関数およびその（観測されない）決定要因を「時間を通じて一定」と仮定している点を変更し、「時間を通じて変化する」と仮定した分析を行うことであろう。その場合、取引先金融機関数の決定要因を「観測されない変数」として定式化し分析することも一つの方法となろう。

2. また、取引先金融機関数が企業のコストに正の影響を与えるという結果を導いただけでなく、コストをかけてまで金融機関取引数を多く保つことのメリットとして、Maddala(1983)の不均衡モデル（この場合、貸出市場の不均衡モデル）を使って、資金制

約がかかっている企業の資金のオペラビリティに正の影響を検出している点にも特徴がある。今後このパートでの分析を深めるとすれば、実証的には、現在別個に行っている不均衡回帰とその結果をベースとした資金オペラビリティ回帰を同時に行うことが望ましいのではなかろうか。

< 報告者リプライ >

1. 今回の論文では、現時点でのデータの制約上、取引金融機関数は一定であると仮定し、時間を通じて一定の観察されない企業属性との相関を考慮した分析を行ったが、ご指摘の可能性は十分ありうる。今後、複数時点での取引金融機関数のデータを収集して、取引金融機関数の決定が時間を通じて変化する観察されない要因にも依存すると仮定し、取引金融機関数と契約条項の内生性を考慮した分析に発展させていきたい。

2. 現段階では、データ制約があるため、Hausman and Taylor model でそのようなモデルの推計を行うことは困難である。しかし、今後複数時点での取引金融機関数のデータが得られれば、他の分析方法が可能になるので、今後の検討課題とさせていただきたい。